

たわしの読書メモ・・・ブログ 735 [廣松ノートⅡ— (3)]

・廣松渉『新左翼運動の射程』ユニテ 1981

廣松さんの運動論・革命論の「三部作」の二冊目です。一冊目で流れを押さえ、対話の主題的なことは、この読書メモを載せる「反障害通信」の巻頭言に書いています。前のメモにも書いたように、これは前のメモの本と時期が重なる文があるのですが、前のメモは1970年までですが、ここには、60年代の文が一つ、70年代中期・後期の文4論攷があります(年が書かれていない文が一つ)。中期・後期の文には、必ずしも「マルクス・レーニン主義」ではない左派理論との対話の試みがあります。

まずは、目次から。

目 次

第一章 情況と新左翼の位相

第一節 人類史的危機と変革主体の混迷

第二節 新左翼の思想

第三節 根本理念の再確認から始めよ

第四節 産業主義イデオロギーを超えて

第二章 マルクス主義革命論の原像

第一節 フランスの二月革命と永続革命論

第二節 『共産党宣言』と『回状』との視差

第三節 ドイツ革命の展相と若干の追体験

第四節 『回状』における永続革命論

第三章 マルクス主義の歴史的問題状況

第一節 マルクス主義の第三段階

第二節 大衆運動の物象化と前衛の問題

第四章 プロレタリア独裁の問題

第一節 マルクス主義と「プロ独」の問題

第二節 プロレタリア独裁論の歴史的基礎

第五章 全共闘運動が語るもの

第一節 東大闘争の現代史的意義

第二節 「壮大な零」に終わったか

初出一覧

編者附録 廣松哲学の諸論点 小林敏明

著作年譜 編集部作成

さて、切り抜きメモです。前のメモと同じように備忘録的に簡単に書き遺します。対話

というか、問題提起を「・・・」の後に斜体文字で貼りつけます。

「第一章 情況と新左翼の位相／第一節 人類史的危機と変革種体の混迷」

「・・・・・・・・全人類が高度な産業文明を機会均等的に享受するためには、全世界規模での計画的に統制された経済生活が要件をなす。・・・・・・・・」 6P

「論者たちは、産業社会の必然的な疎外の第一として、労働生産物の疎外、すなわち、労働主体各自の創出した生産物が当人の所有に属さないという事態を挙げる。・・・・・・・・」 7P
「労働主体各自の創出した生産物が当人の所有に属」する—ロック、そもそも協働的に作られた物はみんなのもの

「論者たちの立論は、しかし、所詮は小市民的な人間像の危機、ないしは、小商品生産者の在り方を理想化し、それを以って人間の本来の定在とみなすイデオロギーの危機にすぎないのではないか？」 8P

「・・・・・・・・全労働の収益を以って人間存在の本来の在り方とみなし、それが保証されぬことを以って直ちに人間疎外を云々する論者たちの立論には十全な権利根拠が欠けているという点である。全労働の収益を以って本来のとみなすのは特殊歴史的な価値判断であり、小市民的な存在拘束性をもったイデオロギーにすぎない。能力応じて働き、必要に応じて配分される生産・消費の共同体、これこそが社会的動物たる人間にとってむしろ“本来の”と言われるべきであろう。」 9P
「“本来の”という設定自体が物象化。廣松さんは『存在と意味』において、協働的連関態という概念を突き出して、そこからとらえ返すと、むしろ、「能力」ということ自体が「コモン」としてとらえられることで、協働によって作られた物も、コモンとなります。

「・・・・・・・・社会的生産の分業的編制、地位と部署が、階級的・身分的に固定化されることなく、機能的・流動的な役割分掌として配位され、各人が社会的要請と能力に応じて主体的にアンガージュする態勢が確立されれば、労働工程が即事的には一定の苦痛を伴うにしても、労働への参与が一種の悦びとなること、このような共同体的協働が実現されうことは決して単なる夢想ではあるまい。・・・・・・・・共同体的な協働を形成する基礎的条件としては、役柄相互間に矛盾がなく、全体的利害と個々人の利害と個々人の利害とのあいだに決定的な背馳がなく、各人が役割期待に呼応しうること、このような契機を数えうる。階級的・身分的差別の固定化を許さず、総社会的な生産過程が有機的・可塑的に役割編成される場合、当該の高度産業社会は生産の場におけるゲマインシャフトリッヒな編制を十全に可能ならしめることと念う。」

10-1P

「・・・・・・・・われわれとしては、「社会主義・共産主義の段階においても高度産業社会たるかぎり人間疎外が昂進する」という論者たちの断案、この「人間存在危機論」には必然性がないということの論決を許される筈である。」 11P

「・・・・・・・・(前二項を押さえ)ここに要請される計画的管理体制は「“高度産業社会に必然的な人間疎外を伴う”がゆえに“人間存在の危機”が愈々昂進する」と案ずる一部論者の先決要求に鑑み、共産主義的なゲマインシャフトの建設によって、且つそれに俟っての

み、当の“危機”が解消されうること、とりあえずこの点まで論断しておいた。／社会的物質代謝過程の高度に組織化された統括体制と人間関係の共同社会的編制との協和的統一を現実化することが今や実践的な課題となる。」 12P

「・・・・・・・・資本主義社会にあっては、労働者といえども職場外の日常生活では万人“平等”な“市民”であり、まさにそのような“市民”のキャッシュ・ネクサス（金銭関係―「金に支配される社会」）で成立するゲゼルシャフトになっており、この状態に安住するかぎり、共産主義的なゲマインシャフトの展望は出てこない。・・・・・・・・」

13P・・・差別の問題を抜け落としている

「・・・・・・・・資本主義社会の体制下の日常的存在からして、論者たちの求めるごとき意識性が広汎な大衆のあいだで即自的に形成されることは元来望むべくもない筈であり、蓋し茲に前衛的部分による「階級的意識覚醒」の系統的活動が要請される所以である。論者たちの謂う“変革主体の危機”は、慥かに、与件的な一事実であっても、主体的に受け留め返さるべきであろう。・・・・・・・・」 13P・・・被差別の問題の前衛は被差別当事者民衆であり、そこから、階級問題に演繹することによって、「階級的覚識」に到達しうる。

「“農村収奪”」 14P・・・「都市―農村」（産業差別）、「中央―地方」これも一つの被差別問題

「・・・・・・・・ソ連邦という負のサンプルを以って将来的な社会主義一般に推及する“悲観的”な論議に対しては、是を厳しく卻ける次第である。」 15P・・・そのことを実践的になしていくには、「前衛党論」や「プロ独」概念とか、レーニン主義とか、ロシア革命が「社会主義の定立」に失敗したこともきちんととらえ返すこと

「・・・・・・・・一種独得の後進国型“国家独占資本主義”を現出している。・・・・・・・・」 16P・・・ボナパルティズムと言われること

「“チリ型”」 18P

「第二節 新左翼の思想」

「資本主義社会体制に対する革命的アンチテーゼとしての社会主義運動の歴史は、従前のところ、「マルクス主義」が名実ともにその主流をなしてきた時代とそれ以前の時期とに、すなわち、前マルクス主義の時代とに大きく分けることができよう。新左翼は、この「マルクス主義」の時代につづく、第三の時代の到来を予兆するものであるように看ぜられる。」 21P・・・前マルクス主義――「マルクス主義」（サルトルのいう「乗り越え不可能な思想」）――マルクス・レーニン主義と西欧社会民主主義（両者とも“変畸”せる「マルクス主義」）、「マルクス・レーニン主義」の「新左翼」でない、新左翼は存在したのか？ 存在し得たのか？ レーニン主義のとらえ返しの必要性

「マルクス主義が社会主義運動の主流としての地位を確立したのは、すなわち、「マルクス主義」の時代が始まったのは、マルクスの死後、第二インターナショナルの前半期を通じてであった。前世紀の末から今世紀の初めにかけてのこの十数年の時期は、資本主義諸国で一斉に労働運動の波が高まり、マッセン・ストライクが席卷した時期でもあった。こ

の運動は必ずしもマルクス主義者が指導したものではなかったが、その過程で、マルクス主義が指導的理念としての権威を確立することになった。・・・・・・」 22P

「「公民」(シトワイヤン)」—「松本礼二」 23P

「管理社会の即自的な組織性に対する人間の名における告発と叛乱は、しかし、それにとどまる限りでは、「マルクス主義」以前と評されざるをえない。謂うところの疎外、いな、「管理社会」「官僚制」ひいては「国家権力」等々、経済機構・政治機構、市民的・公民的秩序となって現前するところのものは——単にハンマーで粉碎しうるとき物在的な自存者ではなく——今日的条件下における人々の営為の物象化なのであり、これを革命的に止揚しえんがためには、この「物象化」のメカニズムを今日的現象形態に即して具象的に究明する必要がある。・・・・・・」 31-2P

「・・・・・・「チェコ革命」に際して『二千語宣言』の中心メンバーであったと伝えられる哲学者カレル・コシークは・・・・・・」 33P

「コシークはこの似而非具体性の世界が成立する物象化のメカニズムを究明することによってそれを実践的に止揚する方策を探求する。右に一端を紹介した立論は、彼の哲学にとって第一階梯をなすものにすぎないのであるが、大よその消息は推測していただけるであろう。」 35P

「ハイデッガーの謂う「世界像の時代」の拠って立つ基礎そのものを対自的にとらえ返し、物在的(「フォルハンデン・ザイン」のルビ)な世界像のみならず、用在性(「ツーバンデン・ザイン」のルビ)な世界そのものをも、商品経済世界における人間の“存在被拘束的(「ザインスゲヴンデン」のルビ)”実践の在り方によって媒介されたもの、その「物象化」Versachlichung として了解していく世界観的な構え——そこでは大衆闘争そのものの進展も、その自己の思想的営為すら、“半不透明”に物象化された相貌で現われる！——、新左翼の思想家たちは、哲学的世界観の次元において、このような了解の構えに立って思想形成を進めつつあるように看ぜられる。」 36P

「第三節 根本理念の再確認から始めよ」

「真木悠介氏」—「<最適社会>か<コミュニオン>か」 38P

「しかしながら、自由・平等・友愛という市民革命のイデオロギーの単線的な延長上に社会主義を位置づけるのは、思想史上の事実に合わない。社会主義たちは、初期以来、「万人の自由」と「万人の平等」とは——啓蒙主義的ブルジョア・イデオログが説くように——単純に調和するものではないということを自覚していた。・・・・・・」 43P

「共同態的なニュー・モラルワールドの理念」 43P

「・・・・・・総じてみると、社会主義の理念にとって、<コミュニオン>型の意想が根底に置かれていることが一応認められてしかるべきであろう。」 44P

「マルクス・エンゲルスは、やがて、淳朴な<コミュニオン>主義を止揚しつつ「科学的社会主義」の新地平を拓いた次第であるが、そこにおいても無論コミュニズムが更めて定礎されているのであり、本稿の論脈でいうかぎり、真木氏の謂う<コミュニオン>型の理念が堅持

されている。」 44P

「・・・・・・・・『ドイツ・イデオロギー』において「労働の廃止」が説かれる所以である。・・・・・・・・」 48P

「・・・・・・・・『ゴータ綱領批判』に見られるとき二段階の区分が論定される。」
48P・・・内容は48-9P

「・・・・・・・・必然の王国から自由の王国への人類の躍入である」 —エンゲルスの引用
50P

「社会主義・共産主義の理念は、前項においてその一端をみたように、マルクス・エンゲルスの場合、単なる社会変革的次元に止まるものでなく、謂うなれば存在論的次元まで射程の及ぶものであった。・・・・・・・・」 50P

「・・・・・・・・また、恐慌や失業という資本主義社会の構造的矛盾の解消策として「経済の計画的な管理と制御」が当為として意識されるようになり、社会主義運動の本来的理念にとっては手段的必要条件たるにすぎないこの契機が、あたかも目標であるかのごとき思念を生ずる所以となった。」 51P

「マルクス主義は、国家の即時廃止を説く無政府主義の非現実性を斥けつつも、国家の漸次的死滅を展望・志向するものであり、過渡的なプロレタリア独裁権力の必要性を意識しつつも、所謂プロレタリア的民主主義を当の過渡的権力と相即的な政治形態として了解するものであるが、始祖達も後継者達も、その動態についてはまだ必ずしも詳らかにしていない。・・・・・・・・」 52P・・・プロ独論—標語だけのひとり歩き

「しかしともあれ、近代的「市民社会」のイデーにみられるとき実体的諸個人を前提した予定調和的な自由・平等が不当前提の悖理である以上、従って、ゲゼルシャフト的編制のもとではたかだか<最適社会>を期しうるにすぎない以上、<コミュン>型の大理想を懐く者にとって当の大命題を社会科学的に基礎づけることはまさに理論的当為である。」
53P・・・アトム的個人というブルジョア思想、マルクス・レーニン主義的新左翼の陥穽、廣松さんの「協働的連関態」という概念から、コモンということを押さえ<コミュン>論へつなげる

「・・・・・・・・先進資本主義諸国のマルクス・レーニン主義党は、・・・・・・・・爰において、運動論的には先進国革命の現実的戦略・戦術の再構築が確かに先決要求をなしている。」

54P・・・反ファシズムの反・国家主義と反・差別主義から再構築していくこと

「第四節 『回状』における永続革命論」

「ルカーチと並ぶ「西欧マルクス主義」の泰斗カール・コルシュは、・・・・・・・・」

57P・・・非マルクス・レーニン主義との対話

「マルクスは『ゴータ綱領批判』以前には、右の如き二段階区分はおこなっていなかった。彼が「共産主義」の社会を論ずるさい、これ以前の時点では、最初から右の第二段階に近いイメージであった。・・・・・・・・」 64P

「“物質の狡智”」 68P

「(未来社会においても勿論「機能上の分業」を廃止するわけにはいかない。だが、各人が“全人的陶冶”を遂げているところでは、役割の分業が、管理者と被管理者、上司と下僚というように属人的に固定化される必要はなくなるであろう。因みに、マルクスの謂う「自由人の連合」、この将来的ゲマインシャフトの完現は「固定化された分業の廃止」を要件とする!)」68-9P・・・「機能上の分業」＝役割分掌

「・・・・・・・・プロレタリア独裁の権力下において官僚主義的管理社会化に堕することなく如何にして社会主義建設を推進するかの方策論、・・・・・・・・」69P

「第二章 マルクス主義革命論の原像／第一節 フランスの二月革命と永続革命論」

(『回状』)「・・・・・・・・プロレタリアートとその前衛の任務は「少なくとも決定的な生産力がプロレタリアートの手に集中されるまで革命を永続させることである」と規定し・・・・・・・・」73P

(マルクスの言)「・・・・・・・・彼らの階級利益を明らかに理解し、できるだけはやく独自の党的立場を固め、一瞬間といえども民主主義的小ブルジョアの偽善的な空文句にまよわされずに、プロレタリアートの党の独立の組織化を進めなければならない。彼らの戦いの闘の声はこうでなければならない——いわく永続革命!」85P

「第三節 ドイツ革命の展相と若干の追体験」

「革命家は謙虚に自己批判する。そして真の自己批判とは、正しい方針を持出し、それを実践することである。」108P

「第四節 『回状』における永続革命論」

「ここには共産党の時代に比べて或る姿勢の変化がみられることは、あらためて指摘するを要せぬであろう。しかも、マルクス・エンゲルスは、ウィーン蜂起の敗北の経験に学んで、「革命的テロリズム」(VII.S.457)という手段を積極的に評価するようになっている。・・・・・・・・」111P

「特に注目すべきは、マルクス・エンゲルスが、二重権力状態を即刻につくれと呼びかけている事実である。・・・・・・・・」113P

(『回状』)「・・・・・・・・一七九三年のフランスでそうであったように、今日のドイツでも、最も厳格な中央集権化を実現することが真の革命党の任務である。」117P

「・・・・・・・・『宣言』においては宛かも自然成長性に委ねるかの趣きがあったのに対して『回状』では、前衛的部分の独自の結集、運動の動力学の真只中に自らを投ずることによるヘゲモニーの拡充、主要打撃との関連性のもとにおける運動のキャナライズ、といった契機が目的意識的に措定されていることである。」118P

「前衛による一元的な階級形成とその指導による大衆操作主義的な階級決戦という発想ではなく、あくまで、それ自体も物象化されて自己運動するところの大衆闘争の動力学にふまえつつ、そこに現出するであろう諸派のヘゲモニー争奪の予料のうえに立って、当の渦中に自からアンガージュすることによるキャナライズということ、『回状』ではこの基本的な構えが貫いていることをわれわれは確認しうる。」118-9P

「この際、『回状』での——一たんは不可避免的に成立する小ブルジョア急進主義的民主派の政権を下から押し上げつつ、武装せるプロレタリアートを実体とする二重権力状態を形成し、革命を永続化して中間左派政権を左翼的に乗り越えることによるプロレタリア独裁の確立という——シェーマとそこでの暴力革命路線が次の了解と相即していることはあらためて絮言するまでもあるまい。」 119P

「・・・・・・・・・・史上最大の革命的策謀家ダントンの金言を藉りて言おう。大胆なれ！ 大胆なれ！ 重ねて大胆なれ！・・・・・・・・・・」 119P

「第三章 マルクス主義の歴史的問題状況／第一節 マルクス主義の第三段階」

「マルクス主義が殆んど全面的といってよいほどの“適応不能症”に陥ったのは、歴史上、今回がはじめてではない。前世紀の末から今世紀の初めにかけて、マルクス主義は二十数年のあいだ、レーニン主義に再生するまでの一時期“死の苦悶”を経験したのであった。」 121P・・・「レーニン主義に再生」？ オールド・ボルシェビキとしての廣松さん

「この論争(「修正派」と「正当派」との論争)は、その後十数年の苦節をへて、レーニンとその同志たちによって弁証法的に止揚されるのであるが、・・・・・・・・・・」 122P・・・「弁証法的に止揚」？—「止揚」しようとして変畸」

「・・・・・・・・・・レーニンとその同志たちは、マルクス主義の原理的な思想性を堅持しつつも、帝国主義段階という新しい歴史的社会的諸条件に対応すべく、マルクス・エンゲルスの思想を継承的に発展せしめたのであった。」 125P・・・「マルクス・エンゲルスの思想を継承的に発展」—帝国主義論としては「継承的に発展」とは言い得るにしても、ローザの「帝国主義論」としての「資本蓄積論」に留意

「われわれは、もとよりマルクス・エンゲルスの理論に関するレーニンの解釈が唯一絶対的に正しかったとか、レーニンによる継承的發展が完全無欠であるとか、この種の立言を敢てするつもりはない。事の眼目は、マルクス主義がレーニンとその同志たちによって、帝国主義段階の世界資本主義に対処しうる形に再編され、新しい発展段階に引き上げられたということの確認にある。」 125-6P

「・・・・・・・・・・晩年のマルクス、特にエンゲルスは、市街戦による勝利がますます困難となる歴史的条件の発生、普通選挙権の獲得によって議会で多数を占める可能性の成立、これらの両面の事実立脚して、議会・選挙を軸とする戦略構想を提示しており、第二インターの主流はこの路線を絶対化しつつあった。これに対してレーニンとその同志たちは、帝国主義戦争期においては、一方で議会の空洞化が生ずることによって議会的勝利が閉ざされること、他方では戦争と戦後の混乱期に市街戦による勝利の現実性が保証されること、要言すれば暴力革命の可能性と必然性が客観的に定立されるに至ったことを洞察し、これにもとづいて革命論を構築したのであった。」 127-8P・・・そもそも「民主主義」的な戦略をとっているところに、暴力革命での権力奪取が波及していくのだろうか？

「・・・・・・・・・・これに対してレーニンは、帝国主義の時代には広汎な大衆が体制に内在化する物質的・イデオロギー的条件が成立していることを洞察し、カウツキー的な外部注入

論を止揚しつつ、かの有名なレーニン主義的外部注入論を定礎し、さらには新しい戦略戦術論とも見合う形で、新しい組織論、新しい前衛党論を仕上げたのであった。」

128P・・・「外部注入論」「前衛党論」自体の見直し・とらえ直しの必要性

「・・・・・・・・・・かつてレーニンとその同志たちが拓いた歴史的第二段階を今一度止揚して、現代資本主義の新しい発展段階に対応する「マルクス主義の第三段階」を開くべく歴史的に要請されている。」 133P

「しかし、マルクス主義は、ブルジョア社会をトータルを超える思想として、まさしくブルジョアイデオロギー一般の地平と異質な、そしてそれを端的に超越する地平を拓くことにおいて成立したのではなかったか？ しかるに“マルクス・レーニン主義者”たちは、爾来、マルクス主義の拓いたこの新しい地平を見失ってしまっている。われわれはこの悲喜劇的な現状を看過できない。」 135P・・・“マルクス・レーニン主義者”という廣松さんのとらえ方

「第二節 大衆運動の物象化と前衛の問題」・・・この節自体が前衛党論の批判になっているのでは？

「一 前衛—大衆という図式の陥穽」

「前衛—大衆という発想も、現代社会の存在拘束性によって、ともすればこの驕慢な「主体—客体」図式に陥る。」 137P・・・そもそも、「主体—客体」図式や二項対立図式自体の批判もあったのに、なぜ、廣松さん自身が、前衛党論に陥ったのか？

「二 マルクス・エンゲルスの姿勢」

「唯物史観を確立して以後のマルクス・エンゲルスは、歴史はいかに人間の営為、各自の意識を伴った営為によってつくられるとはいえ、この営為が物象化して現われるということ、個々人の思想とは独立に、あたかも固有の法則性をもってそれが自己運動することを知っており、啓蒙主義的発想の地平を越えていた。」 141P

「・・・・・・・・・・前衛的グループの活動というものも、総体としては物象化された姿態で進展する大衆運動のダイナミズムの一契機という以上のものではありません。前衛的グループは、たとえ意識のうえでは大衆運動の現状を超えているにしても、物象化されて進展する運動の、構造内的一契機という以上のものではない。前衛と大衆との機能的関係は、このことの対自的自覚のうえに立って措定されなければならない。」 142P

「三 物象化された協働と政治力学」

「・・・・・・・・・・前衛と労働者大衆とのあいだには、なるほど原理的には、対自的な協働が成立可能だということが前提になっている。しかし、それぞれの時点では、まだ真の対自的な協働は成立していない。けだし、もしも真に対自的な協働がすでに成立しているのであれば、大衆はもはや大衆ではなく、前衛グループに属するはずである。いな、もはや前衛—大衆という関係性が止揚されているはずであって、前衛グループと大衆という関係が存立するかぎり、そこでの協働はまだ即自的契機を含まざるをえない。このゆえに、前衛グループは、可及的に多数の大衆とのあいだに高い次元での目的意識の共有化、つまり、

対自的な階級形成を不断に追求しつつも、環境的条件の変様を槓杆とする“水路への導入”という契機を没却するわけにはいかない。」145P・・・「障害者運動」において語られていた、「水先案内人」という概念と共鳴、ただし、大衆たる「障害者」は前衛ではなく、何も語らないでも、その存在によって、「水先案内人」になりうる。

「四 前衛と対自的な協働の組織化」

「マルクス・エンゲルスは『回状』の永続革命論において、真のプロレタリア的前衛はさしあたってはまだ政治的ヘゲモニーからは程遠いということを自覚的にとらえたうえで、物象化された相で進展する対象運動の構造内的一契機としての自己が、その存在において、総体としての政治力学の左方移動にいかにかンゲージュするか、これを明確に規定している。そこでは、組織論としての前衛党論が明確な形で説かれているわけではないが、そのための基礎的な視角をわれわれは読み取ることができる。」146-7P

「・・・・・・自己を手段化的に投企することによって逆に他者を手段化する配備——『回状』ではこれが方針化されている。」149P

「・・・・・・前衛とプロレタリア大衆の対自協働が成立すること、プロレタリア大衆を「主体われわれ」として形成することと相即するわけであって、その局面にいたってはじめて、前衛—大衆という当の矛盾構造が広汎な大衆とのあいだで自己止揚される。けだし、そこにおいてはじめて、協働が即自対自的になるからである。」149P

「プロレタリア革命の前衛は「階級闘争を廃絶すべく階級闘争を戦い、政治を止揚すべく政治に挺身するという矛盾」を生き、前衛—大衆という構図を廃棄すべく、従って、前衛の存在を止揚すべく存在するという「自己矛盾的存在」として、自己否定を自己の存在規定とするわけであるが、この前衛の自己否定、前衛組織—大衆という構図の実践的止揚は、決して啓蒙による同心円の拡大を通じての大衆—の消尽によってではなく、—マルクス・エンゲルスの構想したごとき仕方での、即自協働の政治力学への、前衛的集団の主体的カンゲージュマンを通じて実現される。」149P

「革命という大衆的な対自協働、協働の対自組織化の地平は、前衛集団の不断の自己手段的・自己否定化的な投企という構造内的契機を対自能動因としつつ物象化された協働の弁証法的展開を通ずることによってのみ、はじめて現実のものとなる。」150P

「五 前衛の先見性と特殊組織化」

「・・・・・・大衆運動は、経済情勢の“一価函数”ではない。それを規定する“客観的要因”——これ自体、実は、即自協働の物象化された定在なのであるが——それは多岐多様であり、それには社会心理学的分析の対象となりうるごとき要因まで含まれる。しかし、ともあれ、大衆運動の潮汐は、さしあたり一つの与件として現われるということ、しかも昂揚の到来が間近かに迫っているということ、この来るべき昂揚にどう対処するかということが『回状』の問題意識である。」151P・・・函数概念としての「前衛」—むしろ「後衛」。因果論ではない相関関係。

「・・・・・・だが、大衆はまだそのような先見性をもっておらず、この特殊準備と訓

練は自然成長性に委ねるわけにはいかない。けだし、緊要な特殊的配備として先進的部分にそれが課せられる所以である。」151P・・・「先進的部分」—前衛、むしろ兵站的後衛の必要

「第四章 プロレタリア独裁の問題／第一節 マルクス主義と「プロ独」の問題」

「ところが、バリ・コミューンは、“バブーフ—ブランキー”流の少数者独裁とは異質の、「真に民主主義的な」プロレタリアートの独裁を現示してみせた。・・・・・・」163P

「・・・・・・ブルジョア民主主義、ブルジョア独裁にならされた“選挙民”大衆は、パリコミューンのごとき「真の民主主義」には却って恐怖することなのであろうか。」168P・・・「ブルジョア独裁」にはファシズム論がなく、プロレタリア独裁には反差別論がない

「新左翼は、もとより、レーニン教条主義を事とするものではないが、その本流は、レーニン主義の革命性を現代的諸条件のもとで発展的に継承しつつ、スターリン主義的独裁による革命の篡奪を防止するためにも、マルクスの説いた、かのコミューン型プロレタリア独裁の構想を継承・展開しつつ、その実現を実践的に追求してやまないであろう。」173P・・・レーニン主義自体のとらえ返しの必要

「第五章 全共闘運動が語るもの／第一節 東大闘争の現代史的意義」

「諸個人の営為の総体が物象化されて体制という“網”をかたちづくっているのであり、各自が深くこの網の目に組み込まれている。この限りにおいて、諸個人とその営為は体制の存立にとって不断に共犯的であり、この共犯関係の総体を否定的に変革しない限り、自己を実践的に否定することはできない。ここにおいて“大学人”としてさしあたり問題になるのが、わが内なる帝国主義大学の解体と自己否定との相即にはかならない。」215P

「・・・・・・マルクス主義においては、人間変革と社会変革とは全く相即的である。／「革命は支配階級が他のいかなる方法によっても打倒されえないから必要というだけでなく、打倒する階級が革命の真只中でしか、しみついた古垢をこそぎ落して新社会の成員たるにふさわしい自己陶冶、人間変革をまっとうできないという理由からしても必要なのである」と喝破したマルクス・エンゲルスは「一部エリートが無自覚な大衆をその即自的な意識のまま狡猾的に操縦」しようとする運動方式を厳しくしりぞけた。」215P・・・むしろ前衛党論の否定の論攷

「編者附録 廣松哲学の諸論点 小林敏明」

「・・・・・・マルクス主義はマルクスで終わったのではなく、むしろマルクスとともに始まったということは、まだ繰り返されてよい言葉だ。・・・・・・」253P・・・むしろ「わたしはマルクス主義者ではない」というマルクスの言を想起し、マルクスの思想との対話とその思想の深化こそが必要なのだと思えるのです。

「・・・・・・社会は社会的諸関係なのだ。真の転倒とは、フッサール風に言うならば、個体概念はもちろんのこと、すべての実体化された「基本」概念なるものを、一旦、括弧に入れて、いわばエポケーすることである。／ところが、われわれはフッサールのように、

エポケーしたあとに、自我(たとえ超越論的と修飾されようが)を残さない。なぜなら、それは近代図式の重層化、あるいは再確認にすぎないのであって、地平そのものの転換、超克にはならないからである。かといってこのエポケーは、世界に対する全面懐疑としてのニヒリズムを結果するものではない。残るものそれが「関係」である。それは単に「社会的」「歴史的」という修飾規定が付くだけでなく、すぐれて「実践的」行為連関を実相とした関係なのである。そしてまさに、この実相こそが対自化されるべきであると言えよう。」 263-4P